

台湾の言語地理学はどこまで進んだか？*

洪 惟仁

要 旨

台湾における言語地理学研究は小川尚義の『日臺大辞典』（1907）所載の「台湾言語分布図」をその嚆矢とする。そののち、小川尚義と浅井恵倫は『原語による台湾高砂族伝説』（1935）所載の「台湾高砂族言語分布図」と台北帝国大学土俗人種学研究室『台湾高砂族系統所属の研究』（1935）所載の4枚の「台湾高砂族系統別分布地図」において、非常に正確で詳細なオーストロネシア語の言語と方言の分布図を描いた。

戦後長きにわたって台湾研究がタブー視されてきたために、台湾での言語調査は多くはない。言語地理学的研究の成果は鍾露昇の『閩南語在臺灣的分布』（1967）が代表的なものである。1980年代に入って、台湾の民主化の進展に伴って台湾研究が盛んになり、台湾の言語と方言に対する言語地理学的研究も多様、かつ活発になってきた。

本稿では、ここ百年間の、特に最近の台湾での言語地理学の進展について論じる。

キーワード：台湾、言語地理学、社会言語地理学、言語地図

1. 植民地時代

台湾における言語地理学研究は小川尚義の『日臺大辞典』（1907）所載の「台湾言語分布図」をその嚆矢とする。小川尚義は恩師の東京帝国大学博言学科教授上田万年の紹介で1896年に渡台し、台湾総督府伊沢修二学務課長の下で嘱託として務めた。彼の職務は辞書編集と日本語教育、台湾語教育などの実用的なことであったが、上田万年から

* 本論の内容は、2009年7月4日、天理大学・天理台湾学会第19回研究大会で発表したものである。その後、最新の発展を追加して多少の修正を施した。日本語については遠藤光暁、真田信治、簡月真の各先生に見ていただいた。ここに感謝の意を表す。なお、附図の原版はカラーであるが、諸般の事情からここではモノクロ印刷とした。そのため内容の一部が不鮮明になったことをお詫びする。関心をお持ちの方は筆者のウェブサイト <http://www.uijin.idv.tw> からカラー図版をダウンロードされたい。

当時の最も進んだ言語学の教育を受けていたため、言語学の立場から真剣に台湾語の調査と研究を実行した。『日臺大辭典』(1907)には212ページにわたる「緒言」がついているが、それは実際には漢語歴史言語学、閩南語比較音韻学、台湾語音声学に関する本格的な学術論文と称してもよいものであった。

そのほかに「台湾言語分布図」(【図1】参照)を付録として掲載しているが、それは台湾で初めて描かれた言語地図である。すでに百年を経ているとはいえ、泉州、漳州、客家と蕃地の区画と平埔社の位置を精確に描図している貴重な文献を残しているので、古典的な地図として現在でも頻繁に引用されている。¹

そののち、台北帝国大学「言語学研究室」の小川尚義と浅井恵倫によって『原語による台湾高砂族傳説集』(1935)の付録として「台湾高砂族言語分布図」(【図2】参照)が発表された。これは台湾の高砂族の言語、即ちオーストロネシア語の分類と分布及び蕃社の位置を示した地図である。

同年に出版された台北帝国大学土俗人種学研究室の移川子之蔵、宮本延人、馬淵東一らによる『台湾高砂族系統所属の研究』(1935)所載の4枚の「台湾高砂族系統別分布地図」(【図3】参照)においては、台湾のオーストロネシア語の系統分類に基づく言語や方言とその分布と各々の蕃社の位置が非常に正確かつ詳細に描かれている。

以上の二つのオーストロネシア語の分布図は空前ともいえる業績であり、いままでそれを超えるものはなかったために貴重な研究として重要視されている。²

2. 戒厳令時代

戦後まもない時期から1987年の長きにわたって、台湾は戒厳令時代に入り、中国研究は奨励されたが、台湾研究はタブー視されたため、台湾の言語に対する研究は少なか

1 小川尚義は台湾言語学のパイオニア的な人物である。その業績を記念するために、2007年9月8日、国立台中教育大学で「台湾語言學一百周年語言學國際學術研討會：紀念台灣語言學先驅小川尚義教授」というシンポジウムが開催された。

2 この二つの業績は、台北帝国大学総長幣原坦の「序」によれば「上山(満之進)元台湾総督、学を好み、治を励み、職を退くに臨み、官民金を醸して惜別記念の資となさむとするに際し、挙げて之を台北帝国大学に寄せ、囑するに高砂族の言語、伝説、人種等の調査考究を以てせらる。是に於いて乎、小川尚義教授をして、主として言語の方面を担当せしめ、大阪外国語学校教授浅井恵倫氏に其の一部の分担を依嘱し、移川子之蔵教授をして、主として土俗の方面を担当せしめ、宮本延人助手、囑託馬淵東一氏をして、分担補助をなさしめ、以て其の究査を進めたり。爾来四星霜にして、漸く成稿をみたり。稿を分つて二部とす。一は……「原語による台湾高砂族伝説集」といふ。一は……「台湾高砂族系統所属の研究」といふ。」という経緯によって成ったものである。

った。台湾に関する言語地理学的研究は、筆者の恩師・鍾露昇先生による『閩南語在臺灣的分布』(1967)のみであった。鍾露昇はアメリカ留学の経験を持っており、アメリカで学んだ言語地理学を活用し当時の台湾師範学院と輔仁大学の448名の学生をインフォーマントにして27語に関する閩南語方言を調査し、それに基づき27枚の方言分布図を描いたのである。

これは単語単位の方言差分布図として初めての成果であるが、青焼きコピーで印刷されたために、はっきり見えない箇所があるといった憾みがあった。幸いに鍾先生が調査したデータはそのまま保存されていたため、筆者はそれを全部コンピュータに入力してデータベース化し、ArcView GISを用いてはっきりとみえる言語地図として再生させた(【図4】参照)。

戒厳令時代のもう一つの研究成果として、台湾大学丁邦新教授の弟子でアメリカ人留学生の顧百里(Cornelius Kubler)の修士論文『澎湖群島方言調査』(1978)が挙げられる。これは県レベルでの微視的な調査としては初めてのものである。澎湖県の88村を踏査して得たデータを基に12枚の方言差分布図を描いている。

3. 民主化以降

1990年代に入り、台湾の民主化の進展に伴って台湾研究が盛んになり、方言学も多様化するようになった。依然として伝統的方言学が主流であるとはいえ、最近では社会方言学と方言地理学がようやく活発化してきた。以下では方言地理学の発展に関する主な成果を紹介する。

3.1 言語と方言の分布地図

洪惟仁は1985年2月より個人的に台湾各地の閩南語、および閩南語地域内の福建客家語(いわゆる「鶴佬客」の客家語)について網状調査を行った。洪惟仁は様々な刊行物の中で調査の経過やおおよその成果について発表した。後にこれを『台湾方言之旅』(1992)にまとめて出版した。これは台湾閩南語および客家語の類型地理学研究の簡潔なレポートともいえるべきものである。

巻末には調査資料に基づいて作成された台湾や台北の漢語方言地図を付している。

「台湾漢語方言区画地図」は台湾全体の言語分布を示す言語地図であり、閩南語は泉州、漳州、混合など三種類の系統に区分して、客家語は四縣、海陸二種類の系統のみに区分したが、その後も洪はさらに悉皆調査を続け、新たなデータを得るたびに地図を修正しつついくつものバージョンを発表した。【図5】は2008年の最新のバージョンであり、この地図は客家語の方言を5種類にわけ、オーストロネシア語の分類を施してその区画を記述している(洪惟仁 2009b 所載)。しかしこの地図ではオーストロネシア語について

の方言区分を行ってはいない。

一方、政治大学原住民族研究センターの林修澈教授は 14 種類のオーストロネシア語を 40 種類の方言に分けてその分布図を示している³。これは戦後における最も細かいオーストロネシア語方言地図である。【図 6】参照)

林修澈の地図は方言のアイデンティティに基づいて分類と区画をしているが、洪惟仁は国家科学発展委員会の補助により言語使用に基づいて台湾全体の閩南語、客家語、オーストロネシア語、華語（マンダリン）、および日本語クレオールを村落レベルで詳細に調査している。【図 7】は高雄、屏東におけるその言語分布図である。

台湾の閩南語下位方言の分類は分類基準をたてるのが難しいので、台湾全体の閩南語下位方言区画地図は前掲洪惟仁の「台湾漢語方言区画地図」（1992）の外には少ないのであるが、張屏生は自分の調査したデータに基づいて、より細かい分類を示し、「臺灣地區漢語方言分布圖」を描いている（『台灣地區漢語方言的語音和詞彙』（2007）第一冊の書末に付している）。

一地域についての研究は前掲の『台湾方言之旅』（1992）巻末に付してあるモノクロの「台北地区方言分布図」が初めてである。その後、潘科元の修士論文「大台北地區閩南語方言音韻的類型與分佈」（1996）と洪惟仁「台北地區閩南語的方言類型與方言分區」（2009a）では新たなデータを追加し、分類を再検討して、精密で新しい地図が描かれている。【図 8】は最新のバージョンである。そのほか涂文欽の修士論文『彰化縣閩南語方言音韻的類型與分佈』（2009）も同じ方法で彰化県の方言を分類して方言の区画地図が描かれている。

言語分布図の一番微視的なものは 2004 年から中央研究院言語研究所鄭錦全院士が新竹県新豊郷などで一世帯ごとに言語使用の調査を行い、GPS で位置を測定して描いた地図である。今までに完成した地区は新竹県新豊郷と雲林県麦寮郷である（鄭 2007, 2008 等参照）。【図 9】は新竹県新豊郷の閩南語と客家語の分布図である。⁴

3.2 方言差の分布地図

淡江大学英文系の教授 Warren A. Brewer (ト温仁) は 1993 年から 1999 年にわたり、国家科学委員会の補助の下で、「台湾語言学図集」(*Linguistic Atlas of Taiwan*) 調査プロジェクトを実施した。調査対象は閩南語と客家語であるが、特に閩南語を主体とし

³ 林修澈主編の『族語紮根』（2006）は各言語と方言の分布地図のほかに台湾全体の原住民方言の分布地図を掲載している。また、4つの原住民郷の言語分布を『原教界』雑誌第 13 期—第 16 期に連載している（本論の「引用文献」を参照）。

⁴ 新竹県新豊郷と雲林縣崙背郷の語言分布地図は中央研究院「語言調查之空間系統」からダウンロードできる。ウェブサイト

<http://webgis.sinica.edu.tw/website/hlanguage1/main.htm> を参照。

ている。調査に用いた語彙は計 13 類、325 語である。精密音声表記による印象記述 (impressive transcription) を採用しており、これは聞こえた通りに(音韻論的解釈を経ずに) 音声レベルで記録するという手法である。

Brewer は台湾方言調査史上調査人数の最も多い 876 名ものインフォーマントを調査した。彼も、初めて GIS を地図作成に応用した学者である。調査成果をまとめて、*Mapping Taiwanese* (2008) を発表している。【図 10】参照

中央研究院の歴史言語研究所 (現在の言語研究所の前身) は 1988 年 3 月から 1996 年 7 月まで前後して 9 年間、国家科学委員会の資金援助の下、6 年余りをかけ「台湾地区漢語方言調査研究計画」として、台湾全域の閩南語方言の調査を行った。このプロジェクトは龔煌城氏が代表者を務めたが、実質的には洪惟仁が中心となって調査の大部分を担当した。この調査票に収録した 1000 語以上の調査語彙は音声・音韻・常用語彙・文法の 4 つの部分に分かれる。調査人数は、詳細調査が約 100 名、600 語程度の簡易調査が 175 名ぐらいで、合計 275 名におよび、すでに表記や入力をすませたデータは 13 万件にのぼる。このほかにもまだ表記していない録音テープが多く残っており、将来的には 30 万件のデータがまとまることになるであろう。これらのデータは数量的には単語ごとに 1000 枚以上の詳細な台湾方言地図を作成するに十分なものである。残念ながら、データが非常に膨大なので、今のところ、全部をまとめて完全なレポートを出す段階までにはいたっていない。【図 11】は筆者が鍾露昇先生のデータと比較するためにこのデータを用いて描いた方言差分布地図である。鍾露昇(1967)のデータは 30 年も前に調査されたものであり、インフォーマントは全員大学生であるため、私たちが調査した 1990 年代において 50 代の中年層に相当することになる。一方、「台湾地区漢語方言調査研究計画」のインフォーマントは戦前出生の人たちで、1990 年代には 70 代の老年層にあたるために、二つの年齢層の共時的見せかけ時間的比較 (apparent time comparison) の研究材料を提供している。両者の等語線を比較すると、泉州音の分布が縮小したことが容易に見て取れる。

一地域をとりあげた研究については、洪惟仁「台北地区閩南語的方言類型與方言分區」(2009a) と涂文欽の修士論文「彰化縣閩南語方言音韻的類型與分佈」(2009) が台北地区と彰化県の閩南語方言をそれぞれ詳しく調査したデータを用いて分類と区画を行い、また、その区画図を背景としていろいろな字音の方言差の分布を示している。【図 12】は涂文欽の描いた彰化縣閩南語方言音韻分布図の一例である。これはいろいろな字類の字音の等語線の束 (bundle) の存在を示す方言差分布図である。

一郷、一鎮の方言の差異を取り入れた微視的研究としては李仲民の修士論文『台北縣雙溪閩南語初步研究：調査、比較與方言界線之探討』で 19 枚の方言差分布図を付したものが初めてである。次は李香儀の修士論文『台灣鹿港方言調査及方言地圖之編製』(2003) で、その第 5 章「鹿港方言地圖之呈現」には村ごとの語音や語彙の方言差を地

図で示し、説明を加えている。また張屏生と李仲民合著の「澎湖縣白沙鄉語言地理研究」(2006)では李仲民が張屏生の詳しい調査データに基づき GIS で描いた 24 枚の方言差分布地図を付している。

そのほか、社会言語学の方法を言語地理学に取り入れたいわゆる「社会地理言語学」の地図も作られている。一般的に言えば、おなじ字類の字音は全同となるはずであるが変化の途中にある方言ではおなじの字類の字音がまちまちで、泉州音もあれば、漳州音もある。各字類の方言変異の使用率を統計して指数化を施した指数で地図を描いてみると、当該指数の変化があたかも地形図の等高線のような漸層的变化を見せる。このような地図は方言差の漸層分布図と言われる。

張素蓉の修士論文「台中縣海線地區泉州腔的漸層分布」(2006)では台中県海岸地区の泉州方言区の漸層分布図において泉州音の漳州音に移行する変化を「方言等高線」で示している(【図 1 3】参照)。また簡秀梅の修士論文「關廟方言區『出歸時』字類回頭演變之地理與社會方言學研究」では台南県と高雄県に跨る關廟方言区のいわゆる「出歸時」現象、すなわち普通の tsh を s と発音する方言現象を社会地理方言学的に調査して、中心の s から周囲の tsh に移る変化、通時的にいういわゆる「復帰変化」を漸層の方言等高線で示している。(【図 1 4】参照)

台湾で始めて地理言語学専攻の博士号を取ったのは李仲民である。彼の博士論文『從地理語言學論台灣閩南語語言地圖的編製觀念與方法：以台灣東北部閩南語研究為樣本』(2009)は日本のグロットグラムを改進していわゆる「球状拡散」の立体的な方言差地図を考案したものである。また巻末の「台灣東北部偏漳腔閩南語語言地圖集」に 101 の調査点、125 名のインフォーマントを調査した歴大なデータを用いて描いた 4 枚の「台灣東北部閩南語方言分区図」と 155 枚の方言差分布図を載せている。これは台湾の地理言語学の画期的な作品といえる。

遠藤光暁は最近「台灣的語言方言分佈與族群遷徙工作坊(東部)」(2009 東華大学)で小川尚義の遺著『台灣蕃語蒐録』(李壬癸、豊島正之編、アジア・アフリカ言語文化研究所 2006)のデータを利用して「20 世紀初台灣原住民語言地圖：“手”和“五”」を発表した。南島語の「手」と「五」という二つの語源的に関連する語彙の変種とその分布を論じ、「手」と「五」の方言変種の分布と異同の状況を 3 枚の地図で示している。これは台湾のオーストロネシア語の一単語ごとの変種についての初めての言語地理学研究である。

4. 結論

以上、百年来の台湾の言語地理学的研究の発展を紹介した。主な成果を概略的にしか

紹介できなかったが、近年は言語地理学が台湾でも盛んになりつつあるため、そのすべてを紹介するには無理があり、学術的立場からの詳細にわたる論述は将来に俟つところが多い。その論述と批評は今後の課題である。

引用文献

Brewer, Warren A. (卜温仁)

2008 *Mapping Taiwanese*. 南港：中央研究院語言研究所

小川尚義主編

1907『日臺大辭典』、『日臺大辭典』1-212頁に所載、臺灣總督府民政部總務局學務課發行；全本洪惟仁編『閩南語經典辭書彙編』（1993）第五冊に所収

1907「日台大辭典緒言」『日臺大辭典』台湾總督府

1907「台湾言語分佈圖」『日臺大辭典』台湾總督府

李仲民

1998『臺北縣雙溪閩南語初步研究－調查、比較與方言界線之探討』中國文化大學中國文學研究所碩士論文

2009『從地理語言學論台灣閩南語語言地圖的編製觀念與方法：以台灣東北部閩南語研究為樣本』中國文化大學中國文學研究所博士論文

李香儀

2003『台灣鹿港方言調查及方言地圖之編製』臺北市立師範學院應用語言文學研究所修士論文

林修澈

2006『族語紮根：四十語教材編輯的四年過程』台北·政治大學原住民語言教育文化研究中心

2007「原鄉原社·南投縣仁愛鄉」『原教界-原住民教育情報誌』13期，台北·國立教育研究院籌備處、行政院原住民族委員會

2007「原鄉原社原校·阿里山鄉」『原教界-原住民教育情報誌』14期，台北·國立教育研究院籌備處、行政院原住民族委員會

2007「原鄉原社原校·南庄鄉」『原教界-原住民教育情報誌』15期，台北·國立教育研究院籌備處、行政院原住民族委員會

2007「原鄉原社原校·卑南族的故鄉與原鄉」『原教界-原住民教育情報誌』16期，台北·國立教育研究院籌備處、行政院原住民族委員會

2009「原住民族語言分布地圖的繪製」東華大學原住民族學院·台灣的語言方言分佈與族群遷徙工作坊論文

洪惟仁

1992『台灣方言之旅』臺北·前衛出版社

2002「台灣の漢語方言地理學」馬瀨良雄監修、佐藤亮一·小林隆·大西拓一郎編『方言地理學の課題』pp.127-137 東京·明治書院

2005「從兩個時期製作的方言地圖看臺灣閩南語的變化」(2005/10/25-27)、福州、福州師範大學：第九屆閩方言國際學術研討會

2006「高屏地區的語言分佈」、中央研究院語言研究所·Language and Linguistics 7.2: 365-416

2009a「臺北地區閩南語的方言類型與方言分區」『台灣語文研究』3:239-309

2009b『續修台北縣志·卷三住民志·第二篇語言』(漢人語言部分)板橋：台灣縣政府

2009c「台灣地區的語言分佈」マレイシア·マラヤ大學·「マレイシア華語國際學術研討會」2009(2/14-15)論文

洪惟仁·張素蓉

2008「台中縣海線地區泉州腔的漸層分佈：一個社會地理方言學的研究」『社會語言學與功能語法論文集』pp13-43 文鶴出版有限公司

洪惟仁·簡秀梅

2007「關廟方言區「出歸時」現象的漸層分佈：一個社會地理方言學的研究」中央研究院語言研究所·「語言微觀分佈國際研討會」(2007/9/28-29)で発表

涂文欽

2009『彰化縣閩南語方言音韻的類型與分佈』新竹教育大學台灣語言與其教學研究所修士論文

黃菊芳·郭彧琴·蔡素娟·鄭錦全

2007「漢語方言微觀分佈：雲林縣崙背鄉水尾村的客家方言」中央研究院語言研究所·語言微觀分佈國際研討會

張屏生

2007『台灣地區漢語方言的語音和詞彙』(第1~4冊)臺南·開朗雜誌事業有限公司

張屏生·李仲民

2006『澎湖縣白沙鄉語言地理研究』國立臺北教育大學·第六屆台灣語言及其教學國際學術研討會論文

張素蓉

2006『台中縣海線地區泉州腔的漸層分佈』新竹教育大學台灣語言與其教學研究所修士論文

臺北帝國大學土俗人種研究室（移川子之藏・宮本延人・馬淵東一著）

1935『臺灣高砂族系統所屬の研究』（二冊）東京・刀江書局出版。1996、臺北・南天書局影印二刷

臺北帝國大學言語研究室（小川尚義・淺井惠倫著）

1935『原語による台灣高砂族で傳説集』東京・刀江書院出版

鄭錦全

2008「台灣數位典藏地理資訊在學術研究與資料生產之探討：從數位典藏地理分布談起」台北・國立台灣大學地理環境資源學系、Digital Archives GIS Science『數位典藏地理資訊』23-35

鍾露昇

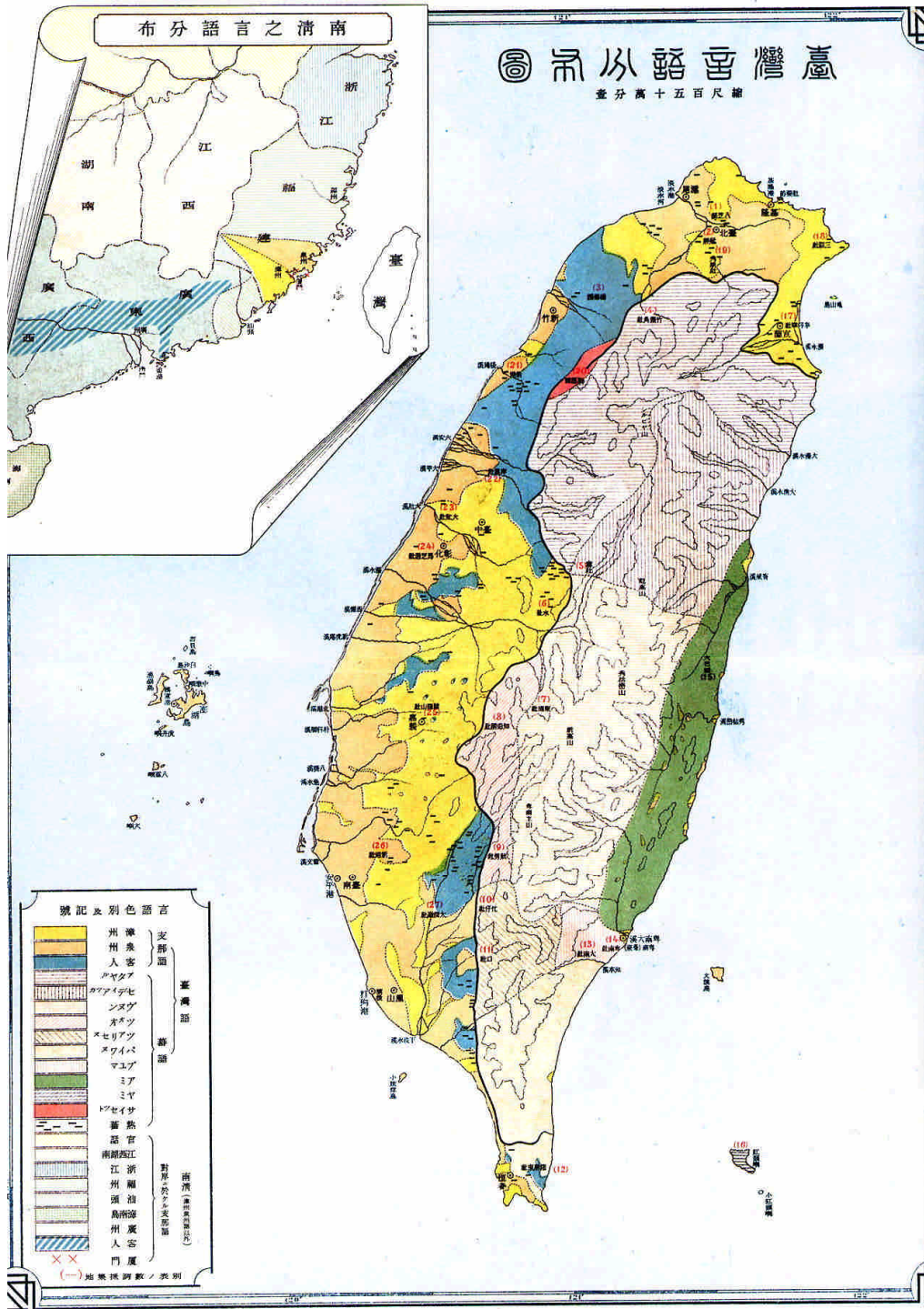
1967『閩南語在台灣的分佈』臺北・國家科學發展委員會研究レポート

簡秀梅

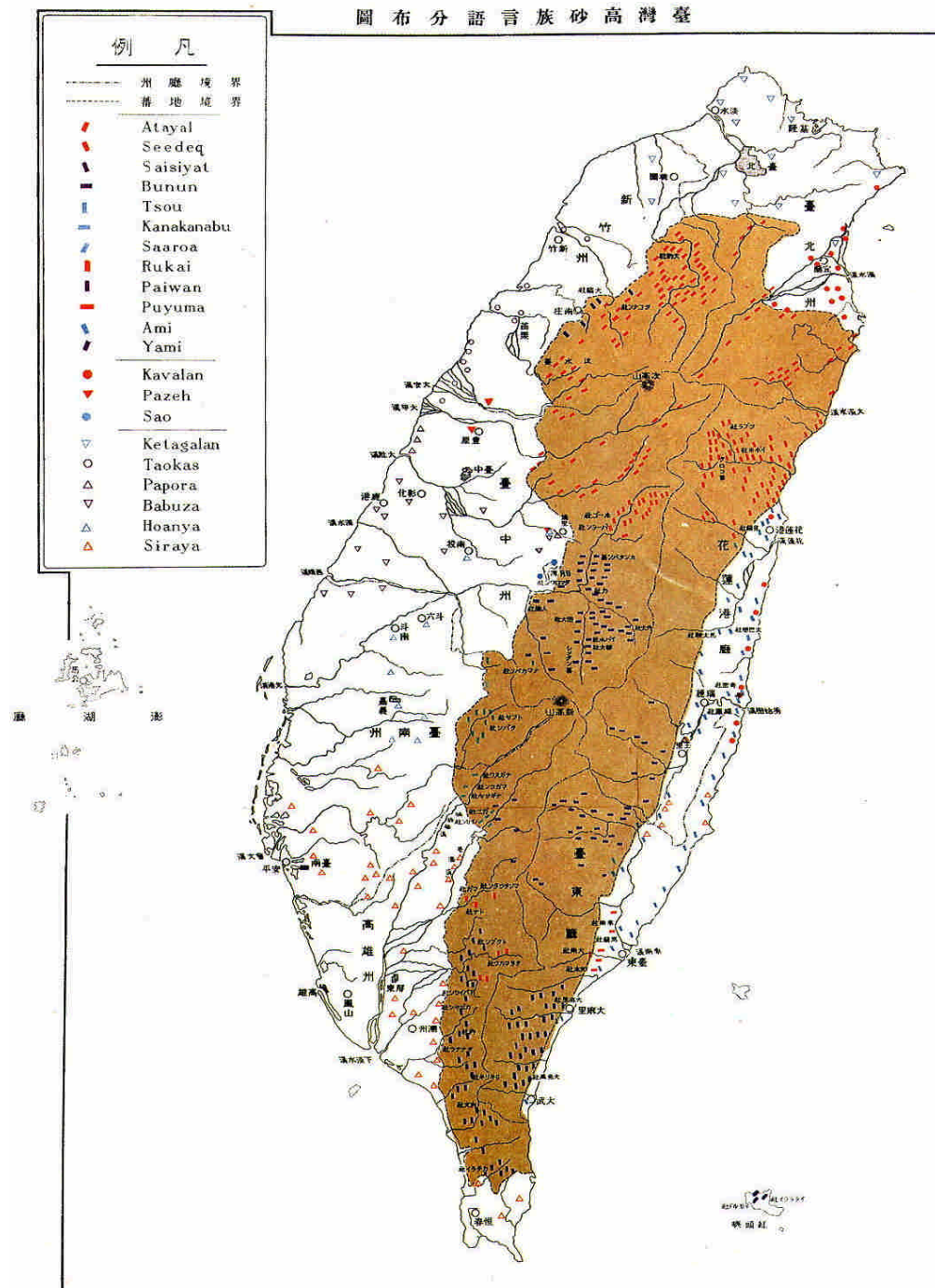
2006『關廟方言區「出歸時」字類回頭演變之地理與社會方言學研究』高雄師範大學台灣語言及教學研究所修士論文

(ANG Uijin 台灣國立台中教育大學臺灣語文學系教授)

【圖1】 小川尚義「臺灣言語分佈圖」（『台日大辭典』（1907）所載）



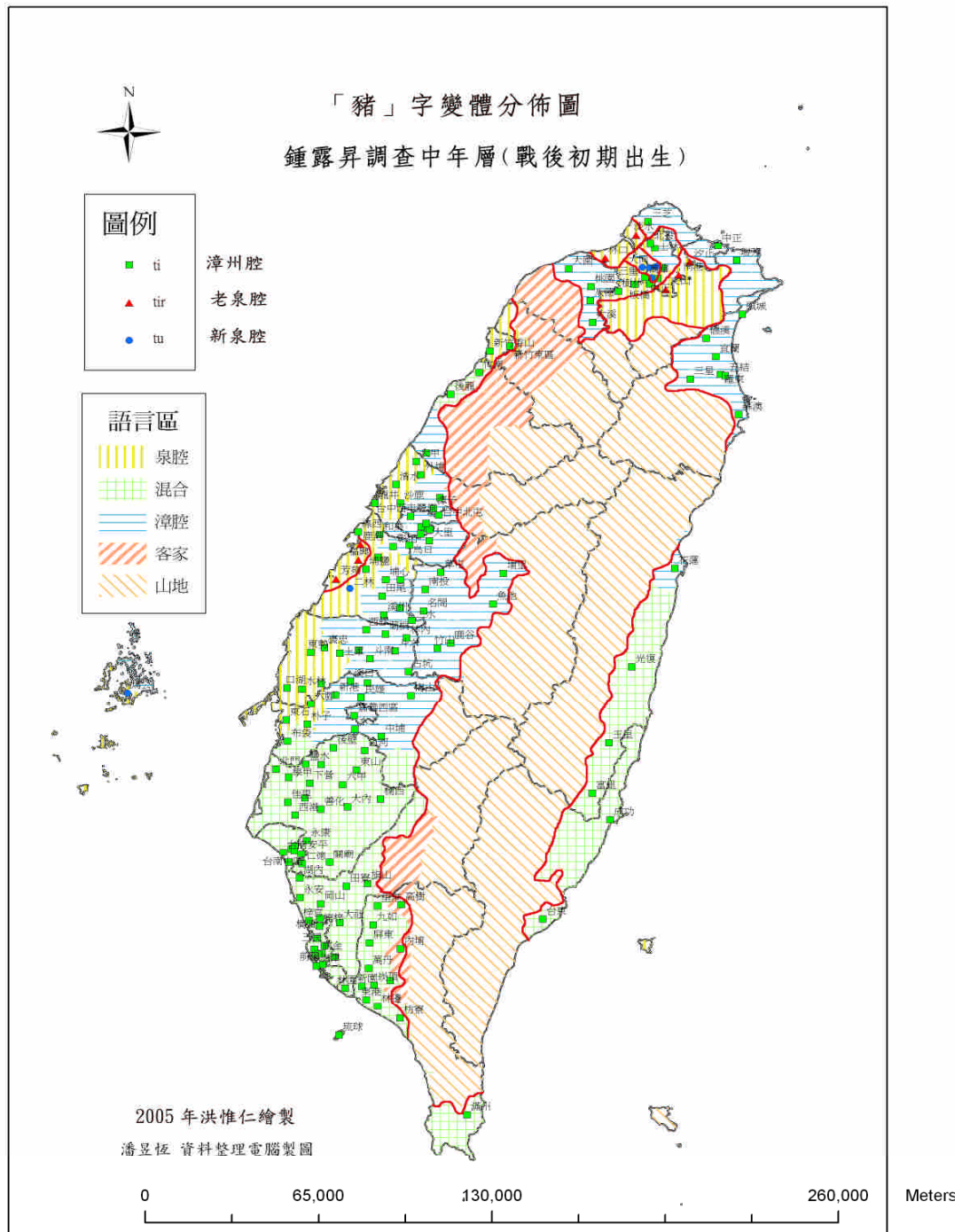
【図2】 小川尚義と浅井恵倫「臺灣高砂族言語分佈図」（『原語による台湾高砂族傳説集』（1935）所載）



【図3】 移川子之蔵、宮本延人、馬淵東一「系統別分佈地図 パングツアハ族(アミ族)」(『臺灣高砂族系統所屬の研究』(1935) 所載「臺灣高砂族言語系統別分佈地図」の一部)

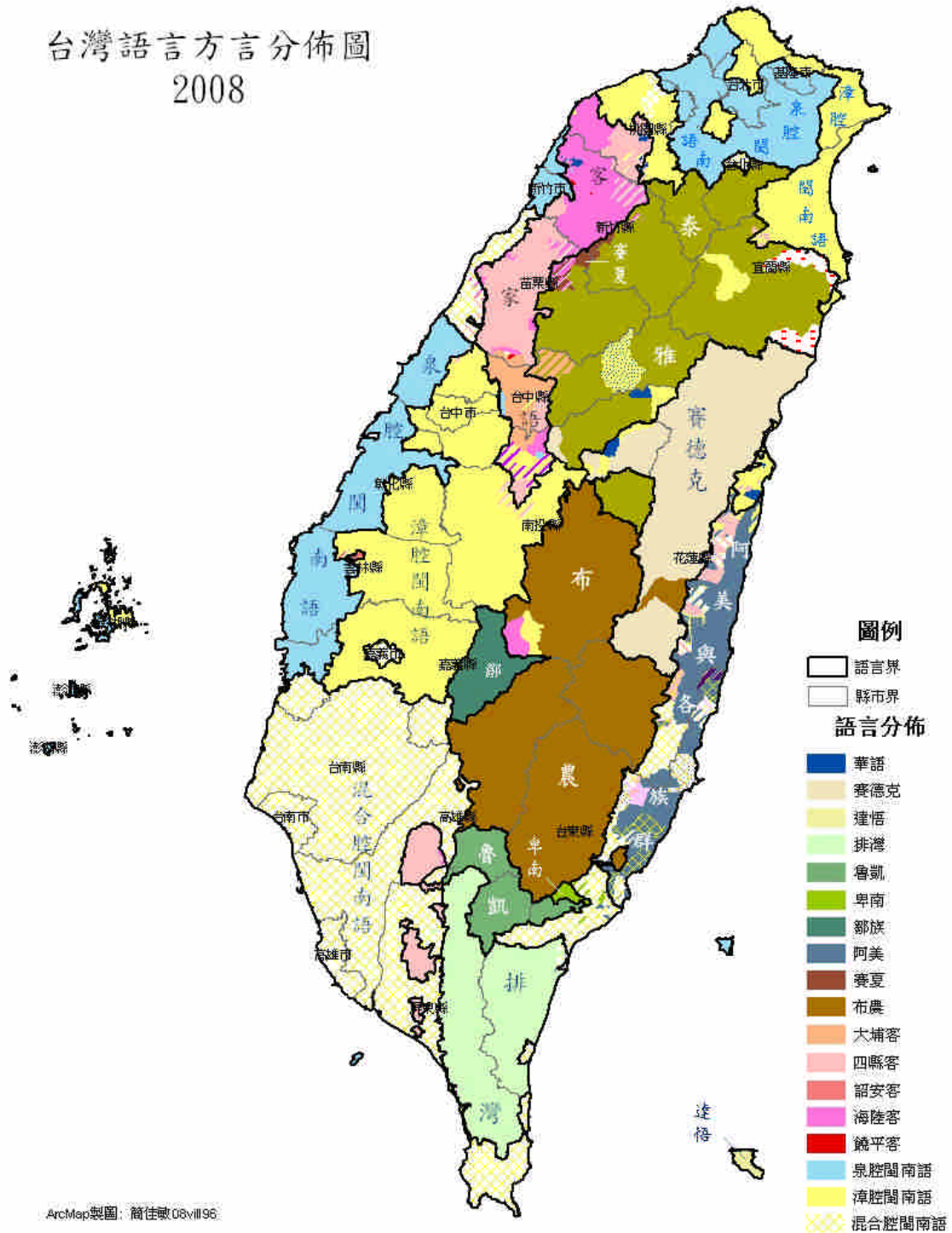


【図4】鍾露昇「『豚』の方言差分佈図」(『閩南語在臺灣的分佈』(1967) 所載方言差の分佈図の一つ、洪惟仁再製)

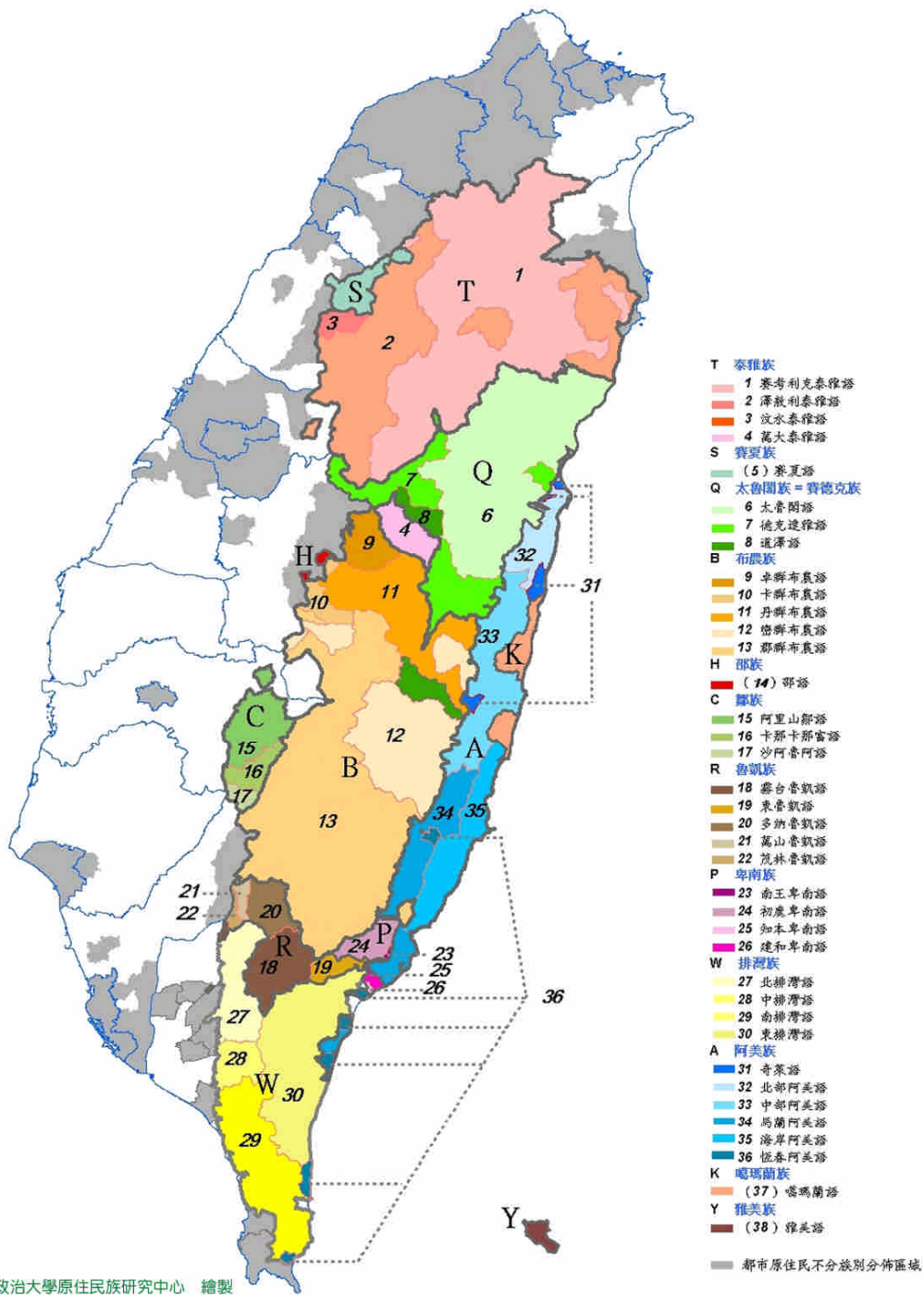


【圖 5】洪惟仁「臺灣漢語方言分佈圖」(洪惟仁「台灣地區的語言分佈」(2009) 所載)

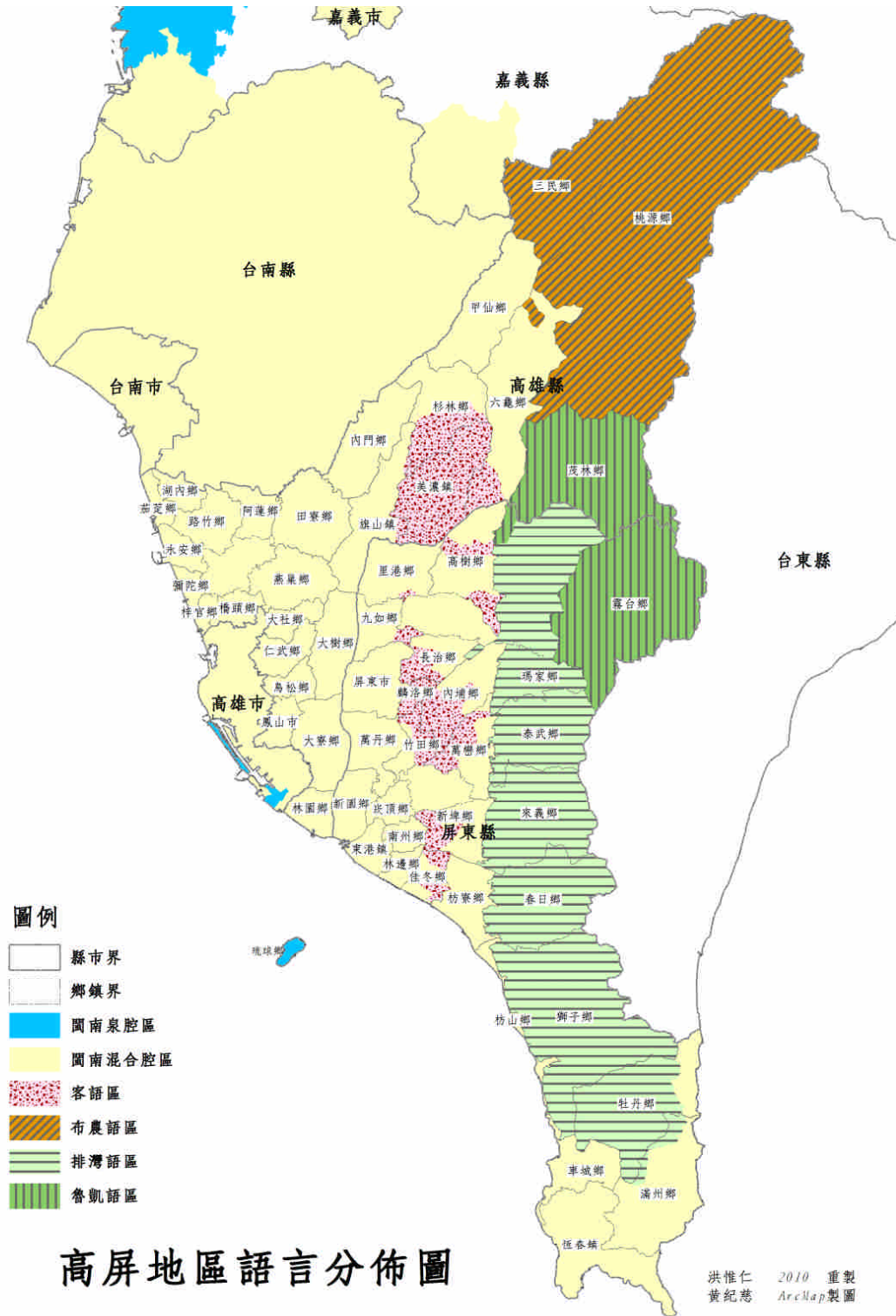
台灣語言方言分佈圖
2008



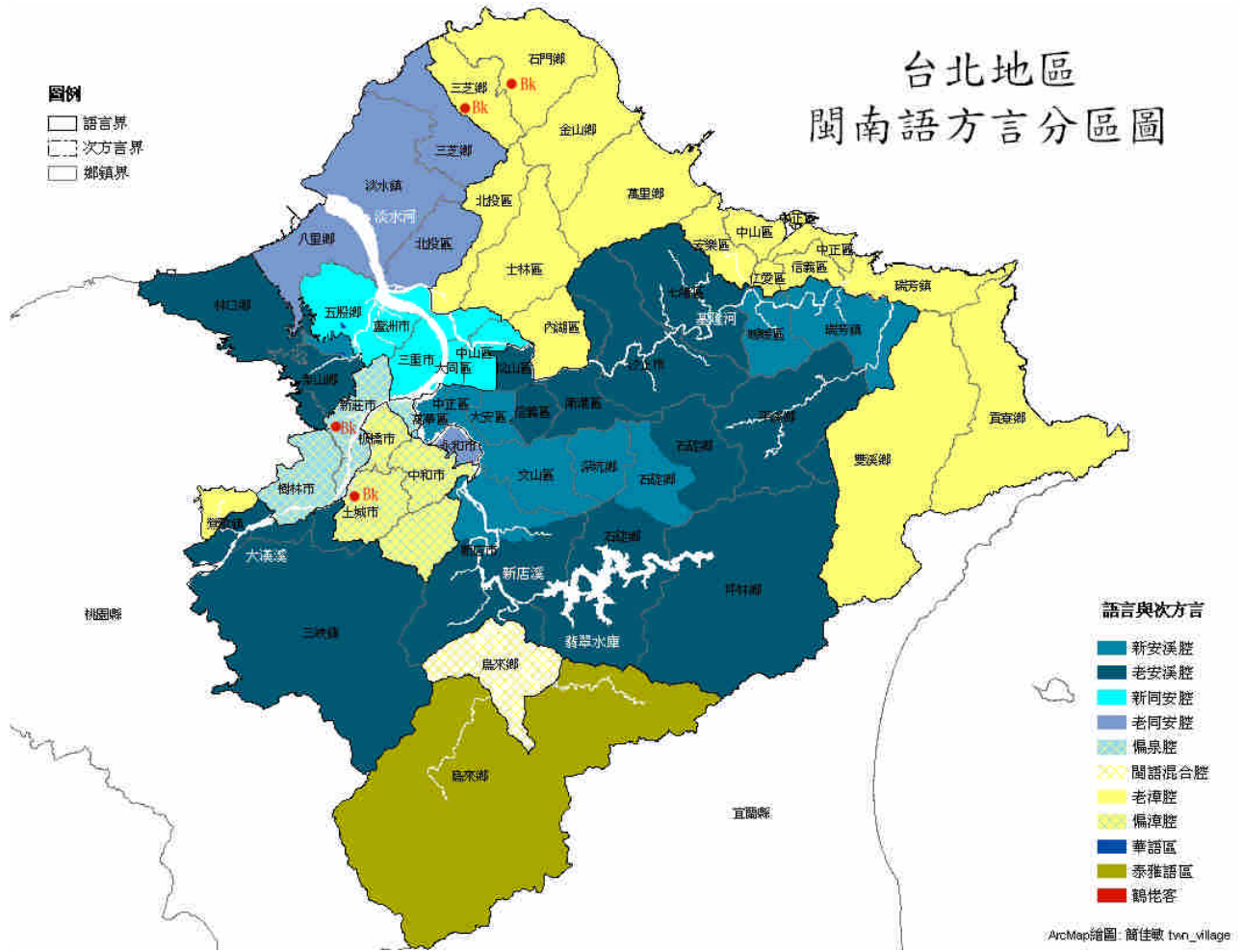
【圖 6】林修澈「臺灣原住民族言語と方言分佈図」（林修澈『族語紮根』(2006) 所載）



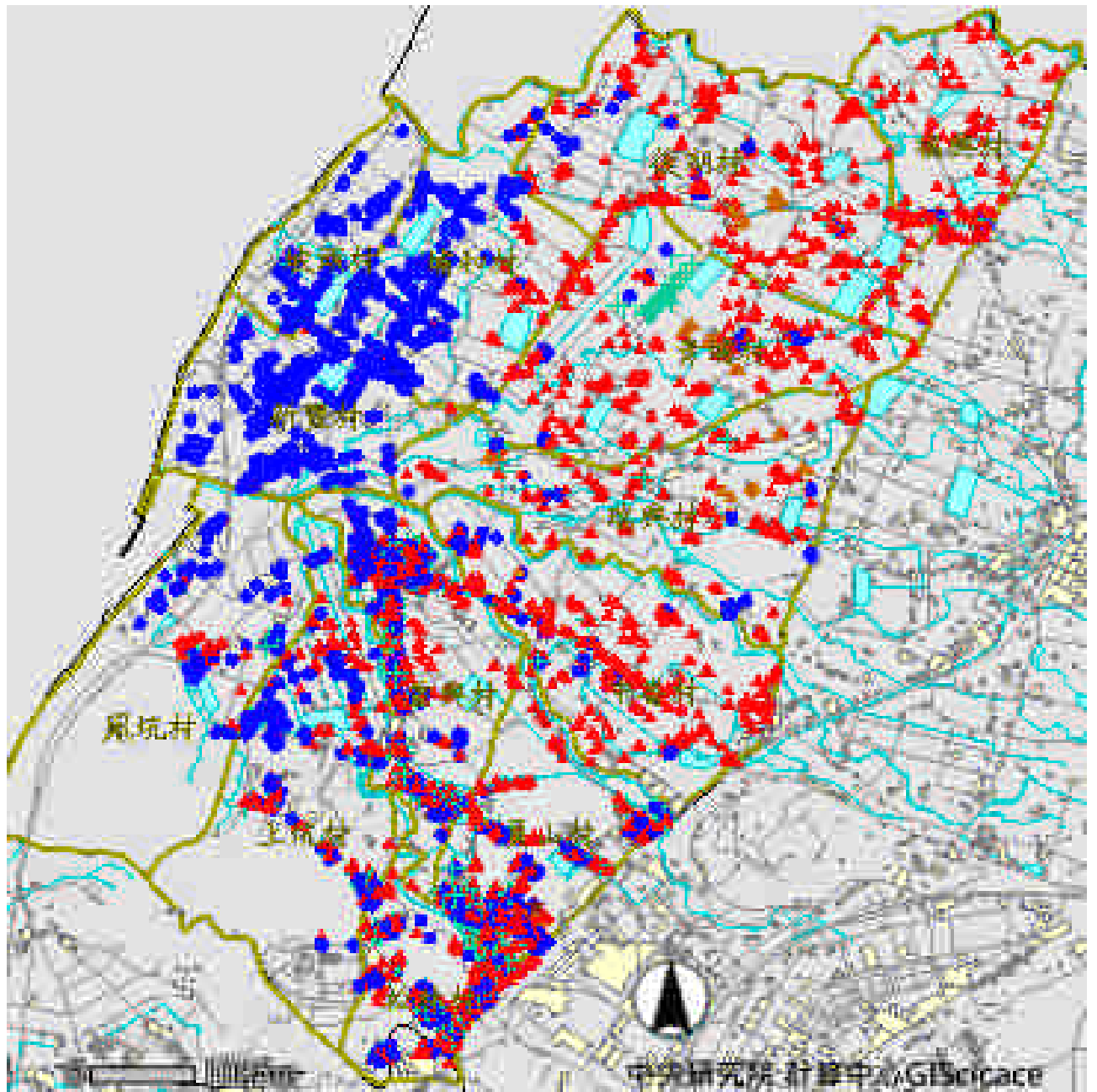
【圖 7】洪惟仁「高屏地區言語分佈圖」(洪惟仁「高屏地區的語言分佈」(2006)所載、2010 年修正重繪)



【圖 8】洪惟仁「臺北地區的閩南語方言區畫圖」（「臺北地區閩南語的方言類型與方言分區」（2009）所載）

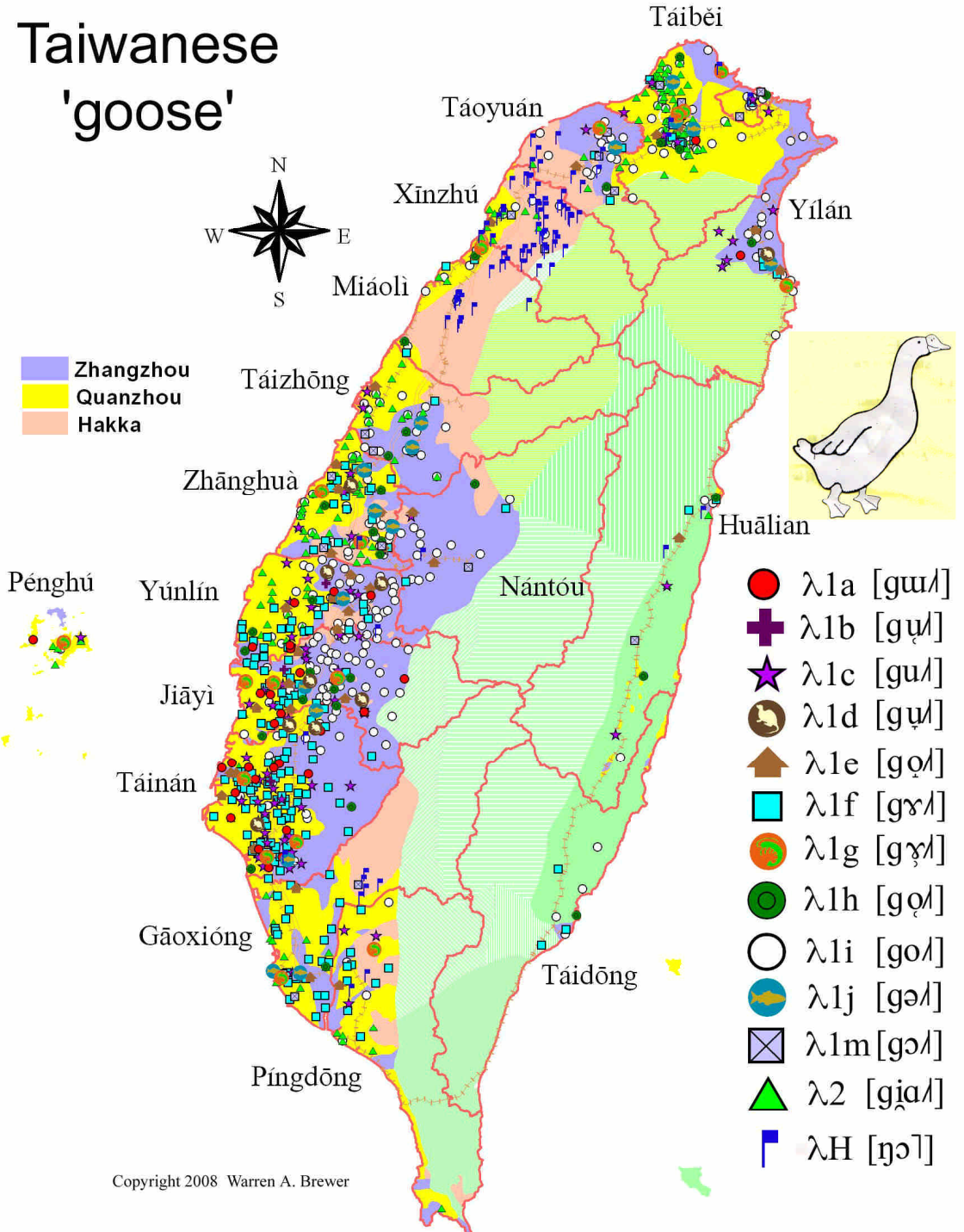


【図9】鄭錦全「新竹県新豊郷の閩南語客家語分佈図」

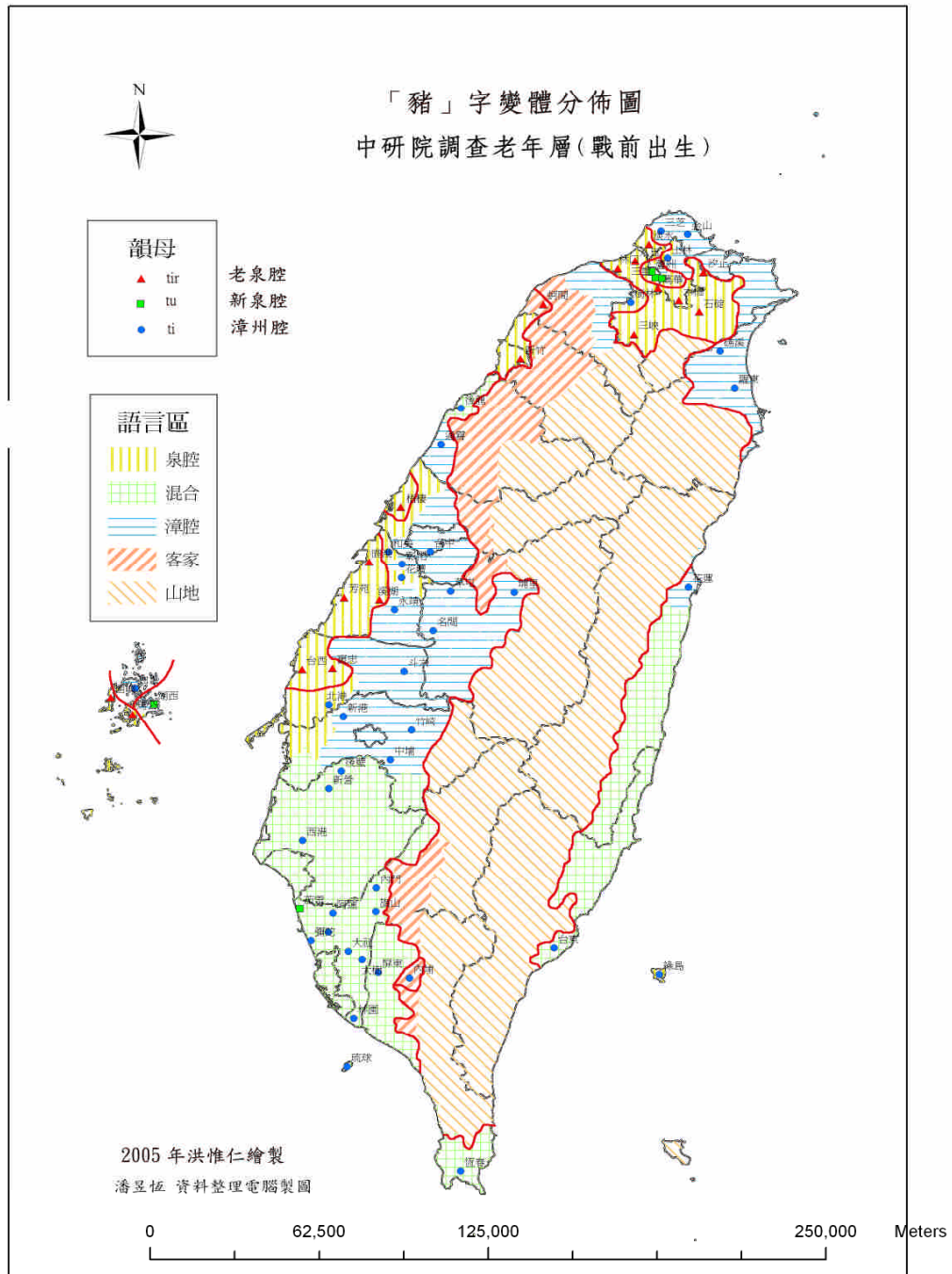


【图 10】 Warren A. Brewer 「『鵝』の変異の分佈図」

Taiwanese 'goose'

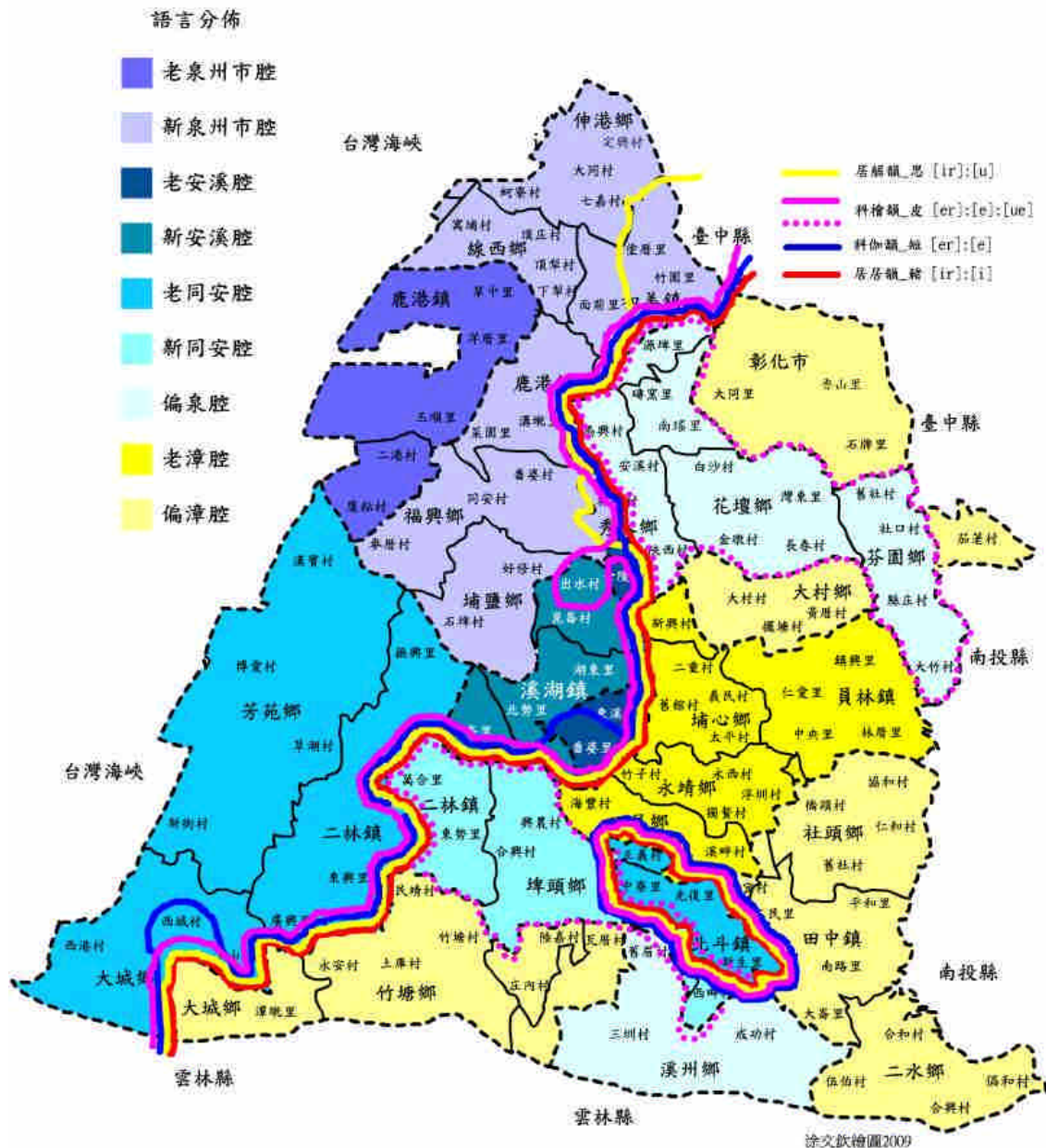


【圖 11】洪惟仁「『豚』の方言差分佈図」(洪惟仁「從兩個時期製作的方言地圖看臺灣閩南語的變化」(2005)所載)



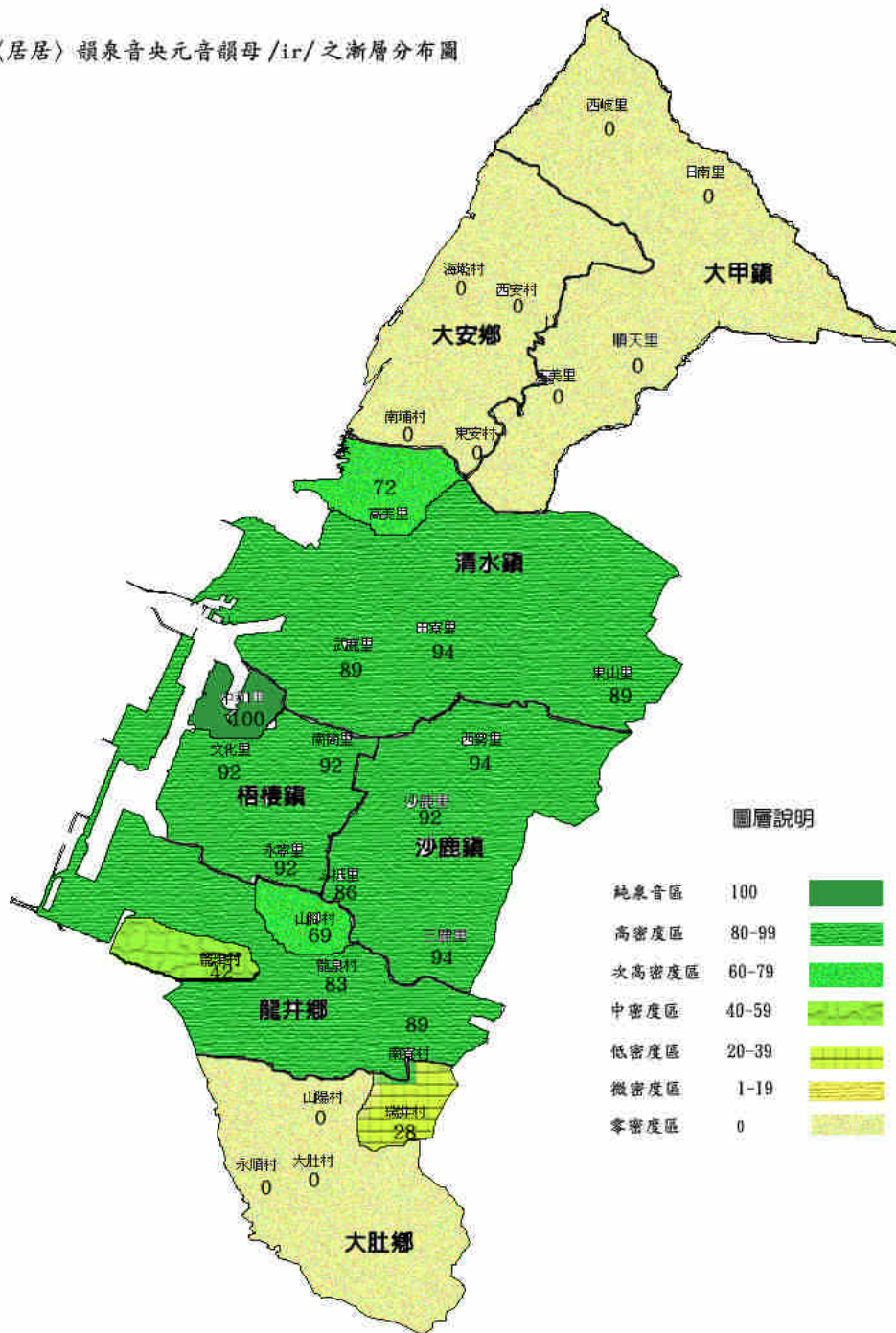
【圖 12】涂文欽「彰化縣閩南語泉州母音の等語線束」の一つ(2009)

<單元音央元音類>等語線束圖



【圖 13】張素蓉「泉州音中央母音*/i/*の漸層分佈圖」(2006)

〈居居〉韻泉音中央元音韻母 */i/* 之漸層分佈圖



【図 14】簡秀梅「關廟方言區 tsh から s に移る方言差の漸層的分佈図」(2006)

